

知求会ニュース

2012年10月

第43号

◎ 博士前期課程、修了おめでとうございます！

2012（平成24）年9月28日（金曜日）午後1時30分から大学本部会議室にて、2012年度秋期学位記手渡し式が開催されました。

今回の修了者は、国際交流研究専攻の第7期生 **王彦佐**さんの1名でした。

◎ 9月入試合格結果

国際社会研究専攻 一般 1名・社会人 1名・外国人3名 計5名

国際文化研究専攻 一般 0名・社会人 0名・外国人4名 計4名

国際交流研究専攻 一般 1名・社会人 0名・外国人 6名・

国際交流・国際貢献活動経験者 3名 計 10名 合計 19名

◎ 宇都宮大学大学院国際学研究科公開授業の案内

平成24年度国際学研究科では、ひろく一般社会人を対象に、「国際化における言語と文化」を公開授業として、以下の内容で **宇都宮大学国際学部 E棟1階1151教室**と**D棟3階1341教室**および**UUプラザ2階**にて開催されます。募集人員は50人、受講料は無料です。申し込み方法は、「公開授業参加希望」と明記し、住所・氏名・連絡先電話番号をご記入の上、「封書」（返信用封筒、80円切手同封のこと）または「電子メール」にてお申込み下さい。

申込み先は、〒321-8505 宇都宮市峰町350 宇都宮大学国際学部総務係 または Email: koksomu@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp です。

公開授業科目 **国際学総合研究B（国際化と日本） 「国際化における言語と文化」**

第1回 10月06日（土）午後2時から4時 **梅木由美子**教授 国際学部E棟1階1151教室
「日本語を通して知る日本」

第2回 10月13日（土）午後2時から4時 **松井貴子**教授 国際学部D棟3階1341教室
「世界の中の日本人—諺を読み直す」

第3回 10月20日（土）午後2時から4時 **鎌田美千子**准教授 UUプラザ2階
「外国語としての日本語をめぐって」

第4回 11月03日（土）午後2時から4時 **友松篤信**教授 国際学部E棟1階1151教室
「グローバル人材の言語と文化」

第5回 11月10日（土）午後2時から4時 **高山道代**准教授 国際学部E棟1階1151教室
「近代日本と日本語」

第6回 11月17日（土）午後2時から4時 **湯澤伸夫**教授 国際学部E棟1階1151教室
「英語の多様性」

第7回 12月01日（土）午後2時から4時 **吉田一彦**教授 国際学部E棟1階1151教室
「人が2言語以上を話すことの意義」

◎教職員人事異動

川島則子さん

事務員の川島さんが7月1日付で経理課資金管理係へ異動されました。後任には、教育学部附属特別支援学校より中田佐江子さんが着任されました。

* 『HANDS next—とちぎ多文化共生教育通信』のお知らせ

2007年9月20日に、ニュースレター『HANDS』第1号が発行されました。2010年度より宇都宮大学特定重点推進研究グループ通信『HANDS』がリニューアルされ、『HANDS next』として再出発することになりました。

第9号(2012年6月22日)

HANDS 3年目を迎えて ～外国人児童生徒教育と日本人児童生徒の国際理解教育～

国際学部教授 HANDS プロジェクト代表 田巻松雄

次なる課題は・・・

『教員必携 続・外国につながる子どもの教育』刊行に寄せて

国際学部 特任准教授 若林秀樹

『中学教科単語帳(日本語⇄スペイン語)』刊行報告

宇都宮大学 HANDS プロジェクト コーディネーター 船山千恵

スリランカの地域活性—女性のチカラ—

教育学部教授 陣内雄次

サルボダヤの歩み道—慈善活動から社会企業活動へ—

国際学部附属多文化公共圏副センター長・教授 重田康博

HANDS next 新連載 「進め 日本語教室」第1回

「日本語教師1年生レポート」

小山市立小山第三中学校日本語教室担当教諭 栗原啓子

3・11を宇都宮で経験した外国から来た子どもたち

宇都宮市教育委員会初期日本語指導教室室長 神山英子

シリーズ; 学生ボランティア派遣体験記 5

支援は微力だけど無力じゃない

国際学部 国際文化学科 3年 岩村 恵

学生ボランティアに感謝

宇都宮市立西原小学校 教諭 江部まり子

事務局便り

・HANDS プロジェクトからのお知らせ

『中学教科単語帳』(日本語⇄スペイン語、別冊つき)と『教員必携 続・外国につながる子どもの教育』をご希望の方へ

第 10 号(2012 年 9 月 3 日)

平成 24 年第 1 回外国人児童生徒・グローバル教育推進協議会報告

国際学部教授 HANDS プロジェクト代表 **田巻松雄**

2012 年度子ども国際理解サマースクール

宇都宮大学 HANDS プロジェクト コーディネーター **船山千恵**

「進め 日本語教室」第 2 回

「日本語教室担当 1 年生レポート」

小山市立旭小学校日本語教室担当 **小林真理子**

第 1 回外国人児童生徒支援会議報告

国際学部 特任准教授 **若林秀樹**

日本教育学会第 71 回大会シンポジウムに参加して

国際学部附属多文化公共圏センター研究員 **佐藤和之**

シリーズ ; 学生ボランティア派遣体験記 7

力になれたらいいなあ

教育学部 学校教育学科 3 年 **呂 弁**

温かな支援をありがとうございます

宇都宮市立陽東小学校 教諭 **宇賀神玲子**

平成 24 年度・教職員サマーセミナー

「外国人児童生徒教育実践を創造するための視点・視野」を終えて

丸山剛史

事務局便り

・HANDS プロジェクトからのお知らせ

「多言語による高校進学ガイダンス」開催

4 月から現在までの活動

12 月までの予定

◎ 平成 24 年度 第 1 回 各学部等同窓会連絡協議会報告

2012 (平成 24) 年 9 月 26 日(水)午後 4 時から、コミュニティフロア(UU プラザ 2 階)にて、平成 24 年度第 1 回 各学部等同窓会連絡協議会が開催されました。出席者は進村武男 学長・石田朋靖 理事・井本英夫 理事・茅野甚治郎 理事・加藤幹彦 理事の大学側 5 名と事務局担当者 3 名、土屋伸夫 国際学研究科同窓会会長・柴田 毅 教育学部同窓会会長・松本展壽 同副会長・小林哲夫 同副会長・阿久津嘉子 同事務局長・上澤和彦工学部同窓会副会長・和賀井睦夫 農学部同窓会会長・竹永 博 同副会長・津谷好人農学部同窓会理事長の同窓会側 9 名でした。議事内容は、検討事項として、1. 各学部同窓会の活動報告等について、2. 大学に対する要望等について、3. その他、そして大学の現状報告等がなされました。

◎ 掲載記事紹介

1. 下野新聞 朝刊 (平成 23 年 5 月 28 日発行) 13 面に、「私の下野新聞批評」コーナーで、「明るい話題提供も役割」の内容でまちびあセンター長・**安藤正知**さん(国際社会研究専攻・4 期生)の記事が掲載されました。
2. 下野新聞 朝刊 (平成 23 年 7 月 2 日発行) 15 面に、「私の下野新聞批評」コーナーで、「中心部活性化の起爆剤に」の内容でまちびあセンター長・**安藤正知**さん(国際社会研究専攻・4 期生)の記事が掲載されました。
3. 下野新聞 朝刊 (平成 23 年 8 月 6 日発行) 18 面に、「私の下野新聞批評」コーナーで、「原発事故から何を学ぶ」の内容でまちびあセンター長・**安藤正知**さん(国際社会研究専攻・4 期生)の記事が掲載されました。
4. UU now28 号 (平成 23 年 7 月 20 日発行) 8 面に、「Welcome to 授業」と題して、国際学部社会科学 国際人権法・**今井直**先生が紹介されました。
(<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/uunow-pdf/uu28/8-9.pdf>)
5. UU now28 号 (平成 23 年 7 月 20 日発行) 10-11 面に、「研究 keyword」コーナーで、「偏差から構造を読み解く一掃主義への批判— ~18 世紀の思想家・ディドロの研究から~」と題して、国際学部文化学科 **田口卓臣**先生が紹介されました。
(<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/uunow-pdf/uu28/10-11.pdf>)

◎ 新刊案内

1. 本年 3 月に、宇都宮大学国際学部**多文化公共圏センター(CMPS)**から**年報 4 号**が刊行されました。主な目次は以下の通りです。

「はじめに」では、「ポスト開発／ポスト・グローバル化時代における国家と市民社会」と題した**重田康博**センター長が掲載されました。

「Ⅰ 特集：転換期における国際学と公共圏」では、**重田康博**教授、**高際澄雄**教授、**中村祐司**教授、**館野治信**さん(博士後期課程)、**阪本公美子**准教授、**高橋若菜**准教授・**渡邊麻衣**さん・**田口卓臣**准教授、**柄木田康之**教授、**田巻松雄**教授らによる 8 本の論文が掲載されています。

「Ⅱ 福島乳幼児・妊産婦支援プロジェクト」では、1 活動報告、2 福島乳幼児・妊産婦支援プロジェクト緊急報告会、3 福島乳幼児・妊産婦支援プロジェクト 2011 年度報告会 4 福島県内の未就学児を持つ家族を対象とする原発事故における「避難」に関する合同アンケート調査が簡潔にまとめられています。

「Ⅲ 活動報告」では、1 宇都宮大学生国際連携シンポジウム 2011、2 連続市民講座「多文化共生について考える」VOL.6、3 第 3 回グローバル教育セミナーが掲載されています。

「Ⅳ 論文・視察報告」では**丁貴連**教授、**仲田和正**さん(博士後期課程)の 2 本の論文と、**重田康博**教授・**陣内雄次**教授の視察報告が掲載されています。最後に、「Ⅴ 関連資料」を含めた 188 頁のものです。

2. 本年3月に、『国際学部および国際学部附属多文化公共圏センターから、宇都宮大学生国際連携シンポジウム2011 学生とアジア・日本の震災復興を考える—大学の専門性を活かした支援のあり方—』の報告書(56頁)が刊行されました。

◎ 国際学部だより

1. 読売新聞栃木版 朝刊 (平成23年9月4日発行) 13面に、「時評」コーナーで、「社会課題 解決の道とは」の内容でとちぎユースサポーターズネットワーク代表理事・**岩井俊宗**さん(国際社会学科・7期生)の記事が掲載されました。

2. UU now28号 (平成23年7月20日発行) 1-3面に、「3・11を撮る」と題して、フォト・ジャーナリスト・**小原一真**さん(国際社会研究専攻・10期生)が紹介されました。

(http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/uunow-pdf/uu28/1_16.pdf)

(<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/uunow-pdf/uu28/2-3.pdf>)

研究室訪問 36 第9号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第36回には国際社会交流研究講座所属の**古村学**先生にお願いしました。

「研究室紹介」

古村 学

<研究について>

地域観光にかかわる研究をしていると、誤解を受けることが多い。観光研究といえば、多くの人々は、「観光開発」や「まちづくり」にかかわるものだと思っているからだ。地域社会に沿ってしてみると、経済的に活性化するためのもの、それが観光にたいする一般的な考えだ。そのため、「どうすれば成功するんですか」といったようなマニュアル的な成功への方策について意見を求められる。この質問にたいしては返答に困る。

観光研究は、おおきく二つに分けられる。政策学などから発した実践的研究と、人類学から発した批判的研究だ(この点について詳しくは拙著「エコツーリズム研究」江口・藤巻編『観光研究データベース』ナカニシヤ書店を参照)。前者の研究では、成功事例の紹介や、成功するための提言などがなされる。そして、研究の目的は観光開発の成功や地域振興へと役だつことにある。そのため、観光開発への有益な助言も可能であろう。しかし、私がおこなっているのは後者の批判的研究であり、直接やくにたつことは少ない。

批判的研究では、観光現象が社会にとってどのような意味を持っているのかを見ることに主眼がある。それは、観光そのものを見るのではなく、観光をとおして社会を見ることでもある。そこでは、「どうすれば成功する」のかは、問題とならない。

とくに私が重視しているのは、自然保護や世界自然遺産といったグローバルな価値観を背景に持った現象である。このグローバルな価値観が、「僻地」や「周縁」といわれるようなローカルな場において、どのようなものとして現れているのか。そのローカルな場にお

いて、どのような意味を持っているのか。そのことを理解したうえで、観光をこえてローカルな場そのものをとらえる。このことが、私にとっての観光をとおして社会を見るということの意味である。

このために私が必要不可欠であると考えているのは、地域社会における綿密なフィールド・ワークである。社会人類学において不可欠な住み込み調査と同じと考えてもらってよい。観光現象というせまい枠にとらわれることなく、その場に生きる人々の生活を理解すること、自然観や社会観などの考え方を理解すること。そのうえで、はじめて研究がはじまるのである。その時には、私にとって観光現象はさしたる比重を持たないものとなる。

<ゼミ（研究室）について>

はじめに書いた観光研究にたいする誤解は学生からもある。観光をするのが好きだから研究をしたいという短絡的なものは問題外として、将来は観光産業で働きたいから、地元を含めた地方社会の観光による活性化に貢献したいといった理由でゼミ（研究室）を希望してくる学生がいる。私の紹介文に「観光」ということばが入っているための誤解だ。学生たちの考えているのは「観光産業」・「観光開発」などであって、すでにみた実践的研究にかかわるものであり、私のおこなっている研究とは異なっている。

なによりも学生に学んでほしいと私が思っていることは、単純に観光を研究することではなく、地域社会に寄り添うことである。このことは、観光以外のテーマを選んだ学生にも当てはまる。そのために、私のゼミに所属するためには、最低でも一カ月の住み込み調査を義務づけている。中途半端に向き合うのではなく、地域社会を理解し、地域社会をとおして現象を見てもらいたいという思いからだ。

住み込みによるフィールド・ワークは、ゼミ選択のための「地域社会論Ⅰ実習」終了後の、三回生の夏休みに、留学するものは留学先で留学中におこなうことになっている。調査は見知らぬ土地で単独でおこなう。また、調査地選定、住み込み交渉などは、すべて学生個人でおこなっており、教員である私はアドバイザーに徹している。そこに学生の成長があると考えているからだ。そして、この夏休みに集めたデータをもとに、一年以上かけて卒業研究を仕上げることになる。就職活動を終えて余裕のあるものは、再度調査に行くことになる。

ゼミ選択の入り口となる実習は、参加者全員で共同調査をおこなうものである。この実習をとおして、調査倫理について深く考える、調査手法を身につける、自分の調査テーマを明確化させる、報告書を仕上げるというフィールド・ワークにおける一連の流れを習得する。これは、夏休みからの単独のフィールド・ワークをおこなっても困らないようにするためである。そのため、かなりの強行スケジュールとなっており、学生たちの負担も大きい。それでも、ゼミのメンバー同士で助けあいながら、自分なりにフィールドに向き合っていく。

現在、ゼミに所属している学生は、原子力問題、フクシマ、農村女性、農業と環境、あ

らたな農業の方向性などをテーマにし、それぞれ自分のフィールド先で調査をおこなっている。いまのところ、ゼミから卒業した者がいないので、この後のどのように進んでいくのかわからない。すくなくとも私がいえることは、学生たちが日々フィールドに向かいあう中で成長しているということである。

(2012年9月22日原稿受理)

博士録 16 第 22 号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第 16 回目には **サ ソチア** さんにお願ひしました。

「研究の紹介と、後輩への助言」

サ ソチア (SAR SOCHEA)

内戦後カンボジア農村における土地所有と経済

—コンポート州サムローンルー・コミューンを事例として—

1. 論文の概略

カンボジア農民の 70%が農業に従事しており、農作物の生産に頼っている。工業化が進んでいないカンボジアにとっては、農業を強化する必要がある。そのため、農業生産資源である土地は農民にとって非常に重要な物である。従って、この意味でもカンボジアにおける土地問題は重要な意味を持っている。

本論文の目的は、次のとおりである。

第 1 に、カンボジアにおける土地所有をめぐる法制度の変化・発展を内戦以後（1979 年）の時期を中心に分析し、その特徴と問題点を分析することであり、第 2 にこの様な制度を前提として、現在のカンボジアにおける土地所有の問題点を明らかにすることである。

現在のカンボジアがグローバル化の過程にあること、あるいは国際経済・社会に包摂される過程にあることは疑いのないところであろう。これを理解するためには、カンボジア国内の法、政治、経済の各領域やその相互関係、また諸外国のそれぞれの国での法、政治、経済の各領域との相互関係とそれらの対外的作用など、多面的で複雑な諸領域・諸関係を分析する必要がある。本研究は、土地所有制度と土地所有という側面に限定して、現在のカンボジアがおかれている社会・経済状況の分析を試みるものである。

本研究の方法上の特徴は以下の点にある。

それは所有一般も、また土地所有も対応する法制度を必要とし、法制度によってその形を決定づけられるのであり、宙に浮いた「土地所有」は存在しない。特にポル・ポト政権崩壊後のカンボジアにあっては、法制度それ自体が段階的に変化し、形成されていった時期であり、「法制度」と実態的な土地所有との相互関連をみる重要性は格段に高い。この

様な観点から、ポル・ポト政権崩壊後の土地所有をめぐる法制度の基本的な枠組みとその変化あるいは問題点を、必要な場合にはクメール語原典に当たりながら確認してきたことが本研究の方法論上の第1の特徴である。

第2の特徴はこうした文献・資料研究にとどまらず、土地所有実態を現地でのインタビューや聞き取りによって解明しようとした点である。近年のカンボジアの土地所有をめぐる法制度整備は急速に進められ、それゆえに外国ドナーの果たした役割も含め、慣習的な所有制度との「接合」やその「取り込み」についての問題点も指摘されている。つまり制度が想定したような形では、土地所有が定着しておらず、それが土地紛争に代表される種々の問題となって表出しているのである。したがって、現在のカンボジアにおける土地所有を把握するためには、法制度だけではなく、慣習的な所有も含んだ具体的な実態を把握することが重要となるのである。

主要な研究成果は次のようにまとめられる。

(a)現在カンボジアでは、土地紛争が大きな問題となっている。紛争発生の基礎的な原因は人口増加であるが、直接的には土地登記が未完成であることが土地紛争を発生させる原因である。これはカンボジアが内戦終了後、土地私有制へ移行する過程で近代的な土地所有制度を整備してきたが、多くの農民は慣習的な規範の上で土地の占有・所有をとらえていること、あるいは近代的土地所有制度に移行する上での経済的基盤を欠いており、これを無視ないし軽視した移行方法をとっているという問題に起因している。

さらに「近代的所有制度」自体も土地紛争の全ての原因に関わるともいえる深刻な贈賄問題によって富裕層に有利なように歪められている。富裕層はその財力を利用し、地方当局の官吏に対して賄賂を用いて「正式に土地を農民から剥奪すること」が可能である。また政府や権力者などは、登記証書を保有していないという理由で農民を立ち退かせることが可能である。

(b)経済的土地コンセッションも土地紛争の原因になっている。カンボジアでは1990年代に多くの土地が経済的土地コンセッションとして企業に付与された。コンセッションをみると、多くのコンセッションが10,000ha以上の土地であるが、これは法律の規定に反している。規定では、10,000haを超えた土地は政府に返還しなければならないが、現在まで該当事例は存在しない。この問題は、土地法や経済的土地コンセッション法の不透明性やカンボジアの法制度が効果的に実施されていないことを、そして外国企業を含む企業を軸に、企業側に有利なように土地所有制度が運営されていることを示している。

(c)経済成長が著しい地域や州の中心部などで発生している紛争は、多くの場合は権力者に関係しているため、殆どの場合に無力な一般市民が被害者になった。これらの土地紛争は、一方ではその土地から得られる利益をめぐる競争から発生しているが、他方では上述した土地所有制度・登記制度の持つ問題に起因している。富裕層による貧困層の土地剥奪や企業に有利な制度運営は土地無所有層を拡大し、社会的・政治的リスクを高める可能性がある。

(d)調査地域では、89年の正式土地分配以降、通常の家計運営の中でも交換・売却・分割等をつうじて土地の無所有化が進行し、所有土地面積の格差が生じていることを確認した。交換・売却・分割等は慣習的方法によって行われており、その主な要因は、内戦の「負の遺産」や病気などである。またそれに加えて以下の事情、すなわち金銭貸借面では「フォーマルな金融」の整備が進んだものの、依然農村に物的貸借における「インフォーマルな高利の」貸付の慣習が残っているという事情も指摘しておく必要がある（詳細については6章を参照されたい）。組織的登記が行われても、個々の証書発行は進まない等の面と総合して考えれば、農村経済は土地所有も含め、依然として慣習的な規範の上で動いていると考えられる。したがって今回の調査では大規模な経済的土地コンセッション等による土地紛争は確認できなかったが、全国的な土地所有制度と慣習的な所有との間隙は大規模な土地紛争を引き起こす潜在的な要因である。

本研究の意義は、具体的内容としては以上の(a)から(d)に述べたものだが、内戦終了後のカンボジアにおける土地所有の制度的枠組みを把握した上で、文献調査ならびに実地調査によりカンボジア農村の土地所有の実態と、現在大きな社会問題となっている土地紛争が発生する構造的要因を明らかにした点にある。

なお、今回の研究では以下のような課題を残している。すなわち、(1)調査地は比較的
土地紛争のない地域であり、今回得られた知見は、土地紛争のさなかにある自治体、富裕層、農民などへの実地調査等によって補足・修正される必要がある。(2)土地所有の変化を促す大きな要因は経済的利害であるが、これについては一般的なものとして言及するにとどまった。一口に経済的利害といっても、実際には①経済権益をにぎる国内の政治勢力・富裕層、②カンボジア国内の企業（カンボジアに出自を持ついわゆる民族系企業）、③外資系企業、④労働者、⑤農民、⑥外資系企業の母国政府、といった多数の利害が複雑に絡みあっている。産業毎によって利害も異なり、外資系企業では対外展開戦略も異なってくる。本研究は、こうした複雑なプロセスを分析する上で、土地所有という側面に限定して基礎的視座を提供するものであると考えているが、より踏み込んだ分析が必要である。

2. 後輩への助言

本論文が完成できたことは、宇都宮大学大学院国際学研究科の指導教員の磯谷玲先生をはじめ、多くの先生方のお陰である。この場を借りて、磯谷先生をはじめ、宇都宮大学大学院国際学研究科の先生方、ほかの皆様にも感謝の意を表したい。

博士論文を作成する際に、いろいろな苦労が経験したことをここでは、後輩の方へ助言してみたい。ただ、これらの助言は私自身が全部このように従って研究成果を出したものではなくて、私自身が実施したこと、実施しなかったが、そうしたらよかったのにと思ったこと、実施したほうがよかったことなどである。要するに、以下のことが主に私の研究に重要だと実感した。

① 学会の決定：学会の決定段階では、指導教員やほかの先生方と相談し、アドバイスを

要求したほうがいいこと。自分が入会したい学会と自分の研究はどれくらい関係性があるのか、年間の投稿できる回数などを考慮したほうがいい。

- ② 指導教員から指導を受ける際に、指導教員の指導やアドバイスを大事にすること。自分の意見よりも指導教員を尊重することが大事である。もちろん、自分が自身を持って、意見を言うことが何より大切であるが、まず指導教員が納得できるまで言いたいことを明確にすることが重要である。
- ③ 多くの先生方と付き合い、多くの指導をいただくこと。研究では、多くの先生方、多くの方と付き合いすることが大切である。多くの先生方と付き合えると、自分の研究へのアドバイスや学会、研究会の紹介などをいただけるので、とても大切である。

(2012年4月6日原稿受理)

知究人 22 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。第43号の第22回目は、英国のオックスフォード大学大学院修士課程に進学された中戸研究室 OG の高橋由香理さんをお願いしました。

今回は執筆者の都合により、次回以降に掲載予定です。

海外だより 12 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、海外在住者の積極的な情報提供を事務局にお寄せ下さい。鎌田研究室 OG の櫻井留美さんをお願いしました。

「ブラジル」とはどんな国か

櫻井 留美

JICA 日系社会ボランティアの日本語教師としてブラジルに来て1年が経ちました。今回の内容は、ブラジルの様子についてということなので、私が今までの1年間で見たこと、感じたことを書きたいと思います。

まず、ブラジルについて多くの日本人は「暑い国」という印象を持っていると思います。私自身も、ブラジルに来るまではそのようなイメージを持っていました。しかし、ブラジルは面積が日本の約23倍もあるとても大きな国で、場所が変われば気候もかなり変わり、南部では雪が降るところもあります。私の任地、サンタ・カタリーナ州フロリアノポリス市も南部に位置しており、冬の気温は13度から20度前後です。南部でも標高が低いいため、雪が降るほどの寒さではありませんが、ブラジルの家は夏仕様で暖房器具もあまり使わないため、室内はかなり底冷えし、室内でも厚手のセーターやコートを着て過ごすことがあります。

場所によって変わるのは、気候だけではなく。言葉、人々、食事、習慣など、州や地域が変わると全てのことが外国に来たかのように変わります。ブラジルと聞いて多く

の日本人が思い浮かべることに、サッカーも挙げられると思います。ブラジル人サッカー選手などの影響で、「ブラジル人」と聞いて、アフリカ系の人々や日焼けした肌の人々を思い浮かべる日本人も多いと思います。しかし、ブラジルは様々な国や地域からの移民を受け入れてきた国であり、北部には比較的アフリカ系やインディオと呼ばれる先住民が多く、サンパウロ周辺には日本、中国、韓国などのアジア系、南部にはポルトガル、イタリア、ドイツなどのヨーロッパ系の移民や移住地が多くあります。私が住んでいるところは南部でヨーロッパ系が多く、近所の方からイタリアの家庭料理をいただいたり、同州の他の市に行けばドイツのお祭り「オクトーバーフェスト」をブラジルにいながら味わうことができます。また、サンパウロに行けば梅干、味噌、納豆をはじめほとんどの日本食を手に入れることができ、リベルダージという日本人街では日本語で談笑しているおじいさんを見かけ、日本にいるような気分になることがあります。沖縄からの移民が多いマット・グロッソ・ド・スウ州カンポ・グランジ市では、日本でも食べたことのないソーキソバを食べ、沖縄文化に触れることもありました。

以上のように、ブラジルには様々な人や文化が混在し、様子を一言で語るのは難しいことですが、1つだけ言えるのは、ブラジルが人、文化、自然、歴史など様々な意味で豊かな国であるということです。まだまだ私の知らない「ブラジル」がたくさんあると思いますが、残りの1年でできるだけ多くのことを見て、ブラジルをもっと知りたいと思います。

(国際学研究科 国際交流研究専攻 第6期修了生)

(2012年8月21日原稿受理)

海外留学今昔 07 第35号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、海外留学経験者および海外留学中の在学者の積極的な情報提供を事務局にお寄せ下さい。今回は、メキシコに留学した**高中祥太**さんとキューバに語学留学した**秋元明日香**さんをお願いしました。

「世界中に友達のと」

高中 祥太

私は、2011年の8月から約1年間メキシコに交換留学生として、スペイン語を勉強してきました。そもそもスペイン語を選んだ理由は、中学生時代に立ち上げたボランティア団体、ストリートチルドレン芸術祭で受けた衝撃によるものだった。この活動は、世界の路上生活をしいられた子供達に、紙とペンを渡し自由に好きな絵を描いてもらう。そして、その絵を日本に持ち帰り、各界の著名人の方々に協力していただき、絵の選考を行う。その選考された絵をカレンダーにまとめ販売。その収益を子供達に送るといふ、サイクルになる活動である。この活動で私は、一枚のお腹の中に描かれた胎児の絵に出会った。そのタイトル『将来自分に住みたい家』。そのコメントにあったのが、「だって自分が15年間生きてきた中で、ここがいちばん安全な場所だから...」。この絵に衝撃を受け、その時はた

だ純粋に友達になりたいと思っていた。それから、この活動を続けて行くにつれ、世界中に友達を作ろうと思うようになった。

これが、留学を選んだ理由であり、世界中でも多くの人口が母国語としているスペイン語を選んだ理由でもある。

メキシコに着いてからは苦勞の連続だった。まず、メキシコに着いて、英語が通じない。空港に着いてから、大学がある州までも行くことができない。やっとの思いをして、ホームステイ先についたが、思ったことが伝えられない。毎日出掛けるたびに、辞書を片手に片言のスペイン語で生活を強いられた。しかし、メキシコの方々の優しさに毎日助けられた。メキシコの方々は本当に優しい。ジェスチャーを交えながら、毎日スペイン語をゆっくりと話してくれる。ホームステイ先のお母さんには、スペイン語を毎晩教えてくれる。大学の友達には、困った顔を見ると、「どうした?」、「なにかあったらなんでも言いな」と口癖のように言ってくれ、全く話せない私に、誰一人として嫌な顔をせず声をかけてくれた。こうして、少しずつスペイン語での会話が身につき、毎日友達が増えていった。ここからの生活はあっという間にすぎ、授業、旅行、パーティーと笑顔が絶えない生活が送れた。最後のお別れ会では、150人以上の仲間が集まってくれ、メキシコの国旗に多くのメッセージを書いてプレゼントしてくれ、絶対に戻ってくると約束して、涙ぐみながら帰国した。私が大好きなスペイン語が『mi casa es tu casa』、私の家はあなたの家と言う言葉である。みんなが待っていてくれる、メキシコには今直ぐにでも行きたい。

留学では、食、歴史、文化などを知る貴重な体験ができると共に、世界中から来る留学生を含め、生涯の宝でもある仲間が出来た夢の様な時間であったと今は思う。また、帰国した今でも仲間からの連絡は日々届き、それが今の最大の楽しみである。

また、当初の目的でもあった、路上生活をする子供達にも多く会い、一日中、たくさんのお話をし、子供達のたくさんの笑顔を見ることも出来た。この活動は今後も続けて行く。

こうして、私の留学体験は終わったが、ここで学んだことを次のステップである就職に活かし、いつかまた皆が待つメキシコに帰り、笑いあえる事を夢み、さらには、世界中に友達の和を作る事を夢み、今後の大学生活を送つて行こうと思う。

(国際学部 国際社会学科 3年在学生)

(2012年8月20日原稿受理)

「未知の国キューバへ」

秋元 明日香

カリブ海に浮かぶ、日本から遥か遠くのラテンの島国キューバ。中学生の時に見た映画で出会ったキューバは、「カリブの赤い島」、「革命の国」など、当時の私にとっては全く未知の国であった。

私が1年間の休学を決めた時、その中でスペイン語圏へ行き、大学で身につけたスペイン語を向上させようと考えた。まず、宇都宮大学との提携校があるペルーやメキシコを考

えたが、せっかくスペイン語圏に行くのなら、長年行きたかったキューバに行くしかない
と思いキューバへの語学留学を決めた。

キューバに行く決めてから最も苦労したことは、情報収集だ。ただでさえ閉鎖的な国
であるのに、キューバへの日本人語学留学者は予想以上に少なく、正確な情報を日本で手
に入れることは非常に困難であった。また、語学以上に関心があった「社会主義下での国
民の生活」を見ることは、キューバにおいては危険な行為であると知り、日本に居ながら
既にキューバの特殊さを痛感していた。

実際に留学していた 3 ヶ月間は、語学留学という目的以上に様々なものを学んだ。その
ほとんどが想定外で初体験なものであった。その度に、日本での常識というものがいかに
狭義的なものかを実感させられた。

語学に関しては、首都のハバナ大学の外国人向けスペイン語コースに通った。宇都宮大
学での学習で自信を持っていた私だったが、独特なスペイン語が高速で飛び交う状況に打
ちのめされた。加えて大学では、語学力の高い欧米の学生に囲まれ、自信を喪失していっ
た。そのような状況から、私は誰よりも勉強に励んだ。毎日の課題に加えた予習復習はも
ちろん、宿の家族との会話やキューバ人の友人たちとの会話・議論を通し、留学の終盤は
自分自身も驚く程の成長を遂げたと思う。

日常生活では、日本人専用の宿にお世話になり、そのオーナーであるキューバ人家族
が本当の家族のように優しく厳しく暖かく幸せだった。そこでの日本人旅行客と家族との
間の通訳も、スペイン語向上の重要な要素の一つであった。また、キューバ人の生活を間
近で見るという目標を達成しながらも、現状の厳しさに対する虚無感を常に感じていた。
入れば入るほど奥が深いキューバ社会が、現代に生きるキューバ人をいかに苦しめている
かを間近で感じながらも、なにもできない自分に無気力感を感じていた。

他には、キューバの島を一周しながら約 8 都市をめぐる旅をしたり、訪れていたローマ
法王を見に行ったり、友達とキューバ音楽のコンサートやライブに行ったりと、3 ヶ月とい
う短期間でキューバのあらゆる面を見ようと動き回った。

3 ヶ月間は本当に短く、毎日が全速力だった。自分の行動力と努力はもちろん、たくさん
の出会いと予想外の体験から様々なことを学ばせてもらい、感謝している。

最後に、休学して留学をした私だが、誰でも必ず留学すればいいとは思っていない。明
確な目的と目標を持ち、「なぜ？」を常に自分に向けるクリティカルな視点を経た後で選ぶ
ことを勧める。そうした結果、私の休学と留学は、自分の価値観をも変えるほどの濃いも
のになった。その価値観を持って、これからの人生をより面白いものにしていきたい。

(国際学部 国際社会学科 休学生)

(2012 年 8 月 8 日原稿受理)

NEW

学生サロン 03 知求会ニュース第 41 号より現役学部生によるコーナーを設けました。

公開シンポジウム『3.11 原発事故と国際学の未来』

西川 明子

福島原発の事故が起きてから一年あまり、私は多くのメディアを通して様々な情報を得てきた。だが今考えれば、それは情報を聞き流していただけであり、事態の深刻さから目を逸らし過ごしてきたように思う。これから長い年月をかけて向き合わなければならない課題を、まるで他人事であるかのようにとらえてきた自分にとって、シンポジウムは私に危機感を与える大きなきっかけとなった。

小原一真氏、二瓶由美子氏、田口卓臣先生のお話は、それぞれ異なる視点から事故をとらえているものであったが、共通していえることは事態の深刻性と多面性であったように思う。いかに現代を生きる個人に課せられた責任が重いのか、個人がするべきこととは何であるのか、そういった問いをつきつけられる話であった。

シンポジウムの中で特に印象に残ったのは、普段あまりメディアに焦点をあてられることのない原発作業員の方々のお話である。何重もの媒体を通してでは決してイメージをすることのできない彼らの思いや状況を、直接聞くことは大変貴重な機会であった。自分の中であたりまえとなっていた平穏な暮らしとは、作業員の方の必死な作業のおかげであるということを知るとともに、それまでの自分の甘い考えを反省した。また、すぐ側で重大な事件や事故が起きているというのに、それを他人事化し見て見ぬふりをしてしまうとはこんなにも簡単なのだということも実感した。

シンポジウム後その反省をもとに、自分がどのような立場でこれからの福島と向き合っていけばいいのかについて随分悩み考えた。様々なメディアによって伝えられる“福島”があり、また人によって置かれている境遇や考えも異なり、そして他人事としてとらえていた自分も実は事故の加害者であり、被害者でもある。福島原発事故の問題が重層性と多面性を持つゆえに、結局明確な答えを出すことはできなかった。だがこの先の社会をつくるのは私たち若者であり、今ある現実だけに満足してはならないということを痛感した。まずは今日持つことのできた問題意識を、一人でも多くの人と共有することから始めていきたいと思う。

最後に、原発事故について深く考えさせるという貴重な機会を与えて下さった方々全てに心よりお礼を申し上げます。

(国際学部 国際社会学科 2年在学生)

(2012年5月31日原稿受理)

キャリア指南 07 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPO や企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。第7回目には中村祐司研究室 OG のバックリー (石原) 佳菜子さんをお願いしました。

「海外でキャリアを築くためにできること。」

バックリー（石原）佳菜子

私は 2005 年国際社会学科（中村祐司研究室）を卒業後、3 年間都内にある欧州の企業で働きました。ドイツ人 CEO の直属部下として働かせていただき、ヨーロッパ式ビジネスの捉え方と日本式捉え方の違いを経験させてもらいました。この経験が原動力となり、私は 2008 年イギリスに渡り、経営学を大学院で学びました。

大学院では実務ですぐに役立つ会計学や法律、マーケティングのコースをはじめ、消費者行動心理学や人事マネジメント学を総合的に学びました。

その知識をいかしてイギリス人パートナーとコンサルティング業を 2010 年に起業し、現在、イギリス IT ベンチャー企業で正社員として働きながら同時に自分の会社経由でフリーランスとして 3 社の IT コンサルティングおよび個人向けサービスを行っています。

国際学部で学ぶ学生さんや卒業生の中にも海外に住んでみたい。働いてみたいと思う人がいるかと思います。

そんな学生さんや卒業生の皆さんにおすすめしたい事は、2 点あります。

それは常に『プロフェッショナルになる』という意識をもち、語学力／コミュニケーション能力を磨いておくということです。

私の働く IT 産業では、日々技術が進化しています。いかにグローバルな視点で最新の情報を押さえ、利用するかというのがビジネス成功の鍵となります。毎月一回は欧州やアメリカの IT 関連ショーに足を運び、情報交換をしたり商談をしています。そこではビジネスレベルの英語が話せるのは最低限必要なスキルでそれ以外に複数の言語スキルや特定の技術や知識が必要となります。

ただ逆に言えば、その国の言葉がビジネスレベル以上にできて、特殊な知識／技術がある＝プロフェッショナルであるならば、例外外国人であろうとキャリアを築くことができるチャンスがあるのです。

言語に関して言えば、学生時代ほど言語習得に最適な時期は無いと思います。

私も今アラビア語を勉強しています。働きながらだとしても週に 1 回のレッスンと宿題をこなすだけで精一杯で、習得までにあと何年かかるのか・・・という感じですが、学生時代はやろうと思えば毎日数時間勉強に費やせます。その言語で映画やドラマを見たり、Lang8 のような無料添削サービスで勉強するのもいいかもしれません。

専門知識を身につけるといふことに関しては、今はインターネットを通じて世界中の情報が手に入ります。私の働く IT 産業に関して言えば、私は毎日通勤電車内でウェブマーケティングやモバイル業界の産業ニュースを英語と日本語でチェックしています。これだけでも世界での動きや日本の動きの違いを学ぶことができ、英語のニュースしか読めない人に比べたら大きなアドバンテージになります。

また興味がある業種でインターンシップやアルバイト、ボランティアをしてみるのもいい経験になると思います。私もイギリスの大学院に在学中に IT 企業でインターンをし、その経験を買われて今の仕事を得ることができました。

もちろんヨーロッパ諸国（特に西欧ですが）では増えすぎた移民の数を減らすため、外国人が取得できるビザの条件締め付けなどが行われています。

しかしそんなヨーロッパであっても、特定のエリアで経験／スキルがあり言語ができる人材は貴重で、ヘッドハンティングなどが盛んに行われています。

将来は海外でキャリアを積むのもいいなーと考えているみなさん。まずは自分にはどんなスキルがあり世界で通用するのかわかるかを考え、少しずつコツコツと『プロフェッショナル』を目指してみたいかでしょうか？

（2012年9月6日原稿受理）

（国際学部 国際社会学科 2005年3月卒業生）

フォーラム 2011年の師走を迎えて、皆様忙しいことと思います。（原稿集めに苦勞しています。）今回は博士後期課程在籍中の磯谷研究室 OG の苗苗さんと市川研究室 OG のフロレス フロレス イルマ ルイサさんにお願ひしました。

今回は執筆者の都合により、掲載を延期します。

●第2回ホームカミングデーのお知らせ

拝啓

皆様、いかがお過ごしでしょうか。宇都宮大学国際学部ホームカミングデー実行委員の松尾です。

本年度、宇都宮大学ではホームカミングデーを開催し、卒業生・修了生の皆様に大学にお越し頂き、旧交を温めて頂く機会を設けることになりました。国際学部でも、独自のプログラムを準備して皆様のご参加をお待ちしております。現在は退職されている先生方や、

在校生の学生にも参加して頂く予定です。新旧のゼミ生や、サークルのご友人方とのご交流の機会に、どうぞご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

敬具

記

日時 10月27日土曜日、13時受け付け開始
場所 宇都宮大学峰キャンパス 1121教室（講演会）、
国際学部A棟4階大会議室（懇親会）
会費 懇親会費（1000円）（当日、懇親会受付にて申し受けます）
プログラム概要（予定）
13:00 受け付け開始
13:30 退職教員（北島名誉教授、岡田名誉教授）による講演会（1121教室）
15:30 懇親会（国際学部A棟大会議室）
16:30 終了
連絡先 国際学部総務係 TEL 028(649)5164

宇都宮大学の公式ホームページより、ホームカミングデーへの参加登録を行う事ができます。ぜひご利用ください。

ホームカミングデーアドレス

<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/important/2012/10/000216.php>

以上

EU支部だより

第38号からイタリア在住の松原真実子さんによる知求会EU支部だより「Newsreel World」を発行することになりました。今回は支部長の都合により配信をお休みさせていただきます。

編集後記：2010年4月26日から知求会ニュースのバックナンバーは国際学部同窓会HP（<http://www.afis.jp>）で見られるようになりました。

同窓会会員の皆様へのお願い：住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。chikyukai@yahoogroups.jp

宇都宮大学大学院国際学研究所同窓会